


メガネの王、
遠距離で
成り上がれ

身体の重さを、

戦術の要に変えろ。




自分の体が、
どれだけ軽く見られて
きたか知っていた。

ボールに触る時間だけが、
自分の価値になると
信じていた。



おい、吉田。
今日はまた最後まで
残るのかよ

——自分の体が、
どれだけ体が、どれだけ軽く
見られてきたか知っていた。



身長は平均より少し低い。
腹周りは余裕があり、
走れば揺れる。

自分は近づいてから
役に立てるタイプ。けれど、
成り上がるは距離が必要だ。

相手の守備を外側から崩して、
崩して仲間の走路を作る。
太っている自分でもできる
できる「違う貢献」。


「重いシューター」の生体力学
生体力学

腕の力ではなく、
腰を落とす。

腹に「軸」を作り、
上へ押し上げる。


スリーポイントは
筋力じゃなく、
作法だ。





吉田。
お前、球は触ってる。
でも、点を
取ってない。

今のままじゃ
今のままじゃ
勝てないぞ



怒鳴っても
何も変わらない。
分からないことを
分かるまで
練習するしかない。

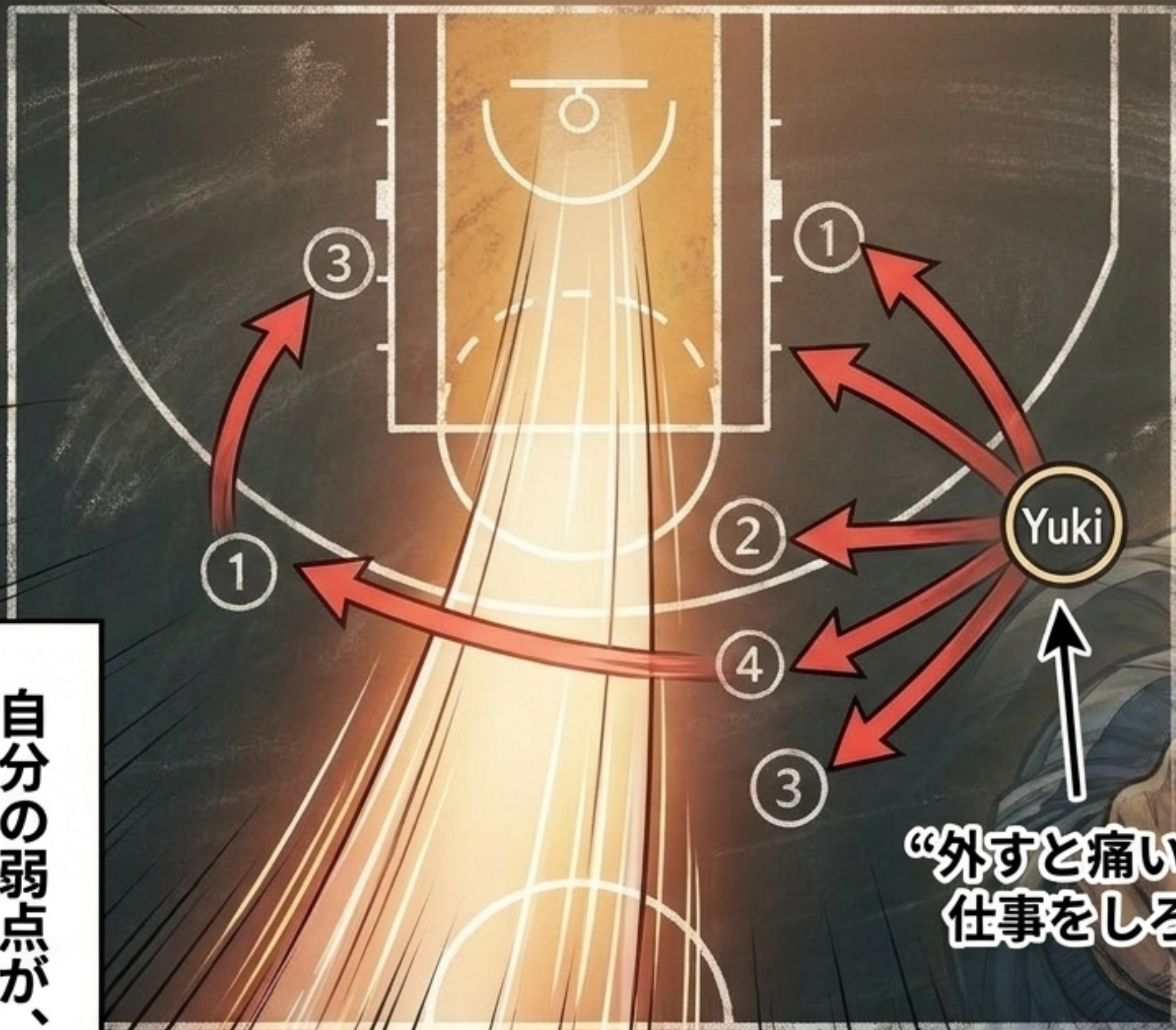
点はこれから
取ります。
——三点も

監督代理・ 服部の戦術

ここだ。
相手が嫌がる角度。
お前の体格なら、
ディフェンスの
意識も引っ張れる。

“外すと痛い場所”で
仕事をしる

自分の弱点が、
勝ち筋に変わる
可能性を
初めて感じた。





怖がれば、味方が
味方自由になる！


吉田、
お前が遠くから
入れたら、相手は
相手は怖がる。



佐伯の“壁”。



小野寺の確実な
回収とパス。

A person with their back to the viewer, wearing a dark jacket with "YOSHIDA" written on the back, stands in a hallway looking into a brightly lit basketball arena. The arena is filled with spectators and bright spotlights create a hazy, intense atmosphere. The person's hands are clenched into fists.

大会当日。
朝の体育館は人の熱で満ち、
床の反射が眩しい。

吉田。
最初のクォーターから
出す。条件は一つ。
——スリーで
相手を嫌がらせる

出場が回ってくるかどうかより、
“役割をやり切れるか”が怖い。
でも、打ち続けます。

【相手のジレンマ】


警戒すれば、
ゴール下が
完全に空く。
完全に空く。



無視すれば、
なら
警戒の
スリー
ポイントが
沈む。



派手さはない。だが、派手じゃなくてもいい。
勝ちには“必然”がいる。



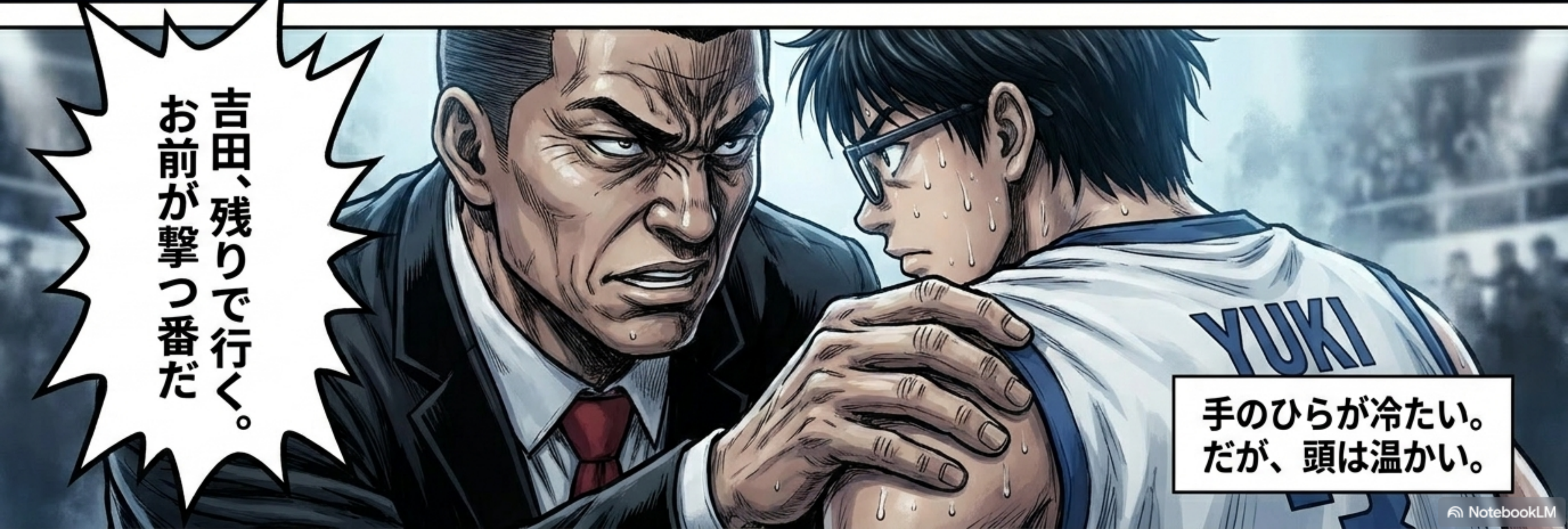
バスケットは残酷だ。
相手はすぐに学習する。

スリーを警戒し、体当たりが増える。
胸元が強く揺れ、息が上がる。

眼鏡のブリッジが汗で滑り、
視界が一瞬ぶれる。
焦るな。



残り数分。
点差は詰まっている。
相手が追い込み、
こちらは焦る。



吉田、残りで行く。
お前が撃つ番だ

手のひらが冷たい。
だが、頭は温かい。

跳ねた位置は、
友樹が得意な距離の
届かないはずだった。
「少し外」。

届かないはずだった。
けれど、踏ん張り、拾い直す。

取れ！

取れ！



入れ!



ここで
決めるのは俺だ

迷わず
軸を作る。

腰を落とす。

腹で支える。

肘を立て、
リリースの高さを
固定する。



ブザーの音が、
歓声の中に
飲み込まれた。



リングに—— 持って、
当たって、落ち、落ち切る。



放たれたボールは、
放物線が長い。

吉田……
やっぱり、
お前、いるな

次も使う。
点を取っただけじゃない。
相手の守備を壊し、
チームが前へ進んだ

スリーは遠い。
でも、遠いからこそ
入ったときの世界が広い。
走ろう。
走ろう。もっと高く、
もっと速く——